に　似た者同士には落とし穴

人には「ウマが合う人、合わない人」がいる。私は、他の人からどう思われているかは知らないが、かなり他人とウマが合うというか合わせるのが上手な方ではないかと思っている。それでも、残念ながらこの人は苦手という人はいる。

まちづくりで何かコトを起こそうとすると、ウマが合う人を探すところから始まる。そうではないアプローチをされる方もいるかもしれないが、あえて苦手な人と組むことはない。そうでなくてもしんどいことはいっぱいあるので。出会いが良ければ、あれこれ説明しなくても話や気持ちが通じる。それがきっかけに磁石のように同じ思いを持った人が集まってくることもある。そうなればコトを起こすのも早い。

ただ、まちにはいろいろな考えを持った人がいる。皆、同じ思いや考えだったりするとかえって怖い。ウマが合う人とコトを起こし、それがうまくいくと知らず知らずによそが見えなくなったり聞こえなくなったりすることがある。「どうして私たちのやっていることに関心を持たないのだろう。少しは私たちのようにまちのことを考えたらどうなの」となってくる。よりダイナミックなムーブメントを起こすには仲良しクラブの枠に収まっていてはいけない。他の人たちはどういう思いを持っているのかということに想像をめぐらし接点を探る必要がある。そうしなければいつの間にか片寄った考え方を持つ人たちとのレッテルを貼られ孤立してしまう。

まちづくりプランナーとして地域の合意形成をお手伝いする場合はなおさらである。ある考え方が一定の支持を得ているからといってそのまま進めるのは注意しなければならない。他の考えに立つ人がなぜそう考えるのか、できるだけその人の側から物事を考え、切り捨てるのではなく包含できる方向を常に模索する姿勢が求められる。そこを丁寧にすることでそれまで気づかなかった新しい方向性が見えてくることもある。

事務所の口の悪い若いスタッフがよく「まちづくりって、まちづくりオタクの閉鎖的世界でちょっと近寄りがたい雰囲気がある」などと自分をタナにあげて言っている。いずれにしてもウマが合う「似た者同士には落とし穴」があることを常に忘れないようにしなければならない。